

各関係機関団体の長
各病虫害防除員 } 殿

福岡県農林業総合試験場長
(福岡県病虫害防除所)

技術情報第14号

キウイフルーツかいよう病 (Psa3系統) の冬春季防除について

キウイフルーツかいよう病 (Psa3系統) については、平成26年4月に県内で初めて発生が確認されて以降、防除対策に努めているところです。

昨年は2月10日に本病の発生が確認されており、早い時期からの対策が重要となります。剪定後の薬剤防除やほ場の定期的巡回による早期発見に努めましょう。

1 対象作物名：キウイフルーツ

2 病虫害名：かいよう病(Psa3系統)

3 これまでの発生状況

平成26年は県内の限られた1地区での発生であったが、平成27年は複数の市町で発生が確認された。両年とも、4～5月に発生が著しかった。

平成28年は1月下旬に記録的な寒波が来る等、寒暖差が激しかったことから樹体に亀裂が入ること、また、暖冬の影響で樹液流動も例年より早まったことから、初発は平成27年よりも1か月以上早い2月10日に、枝からの褐色の樹液の漏出(菌泥)を確認した。

さらに、4～5月の強風を伴う降雨により、菌泥が周囲へ飛散し、感染が助長され、中国系品種を中心に発芽初期から、葉の褐色病斑の発生が拡大し、その後ヘイワードでも確認されるようになった。

4 本病の発生生態

(1) 病原体

細菌 *Pseudomonas syringae* pv. *actinidiae* biovar3

(2) 主な感染時期

- ・早春～初夏(3～5月)、秋～初冬(10～12月)
- ・増殖適温：10～20℃

(3) 感染・侵入経路

- ・樹体の接触による傷口感染
- ・ハサミなどの器具の使い回し
- ・罹病樹から採取した穂木の接ぎ木
- ・罹病苗木の持ち込み
- ・汚染された花粉の使用
- ・土壌伝染については確認されていない

(4) 発生しやすい条件

- ・春と秋の風当たりが強い

- ・寒気が停滞しやすい
- ・秋の冷え込みが早く春が遅い

(5) 感染拡大の仕組み

- ・主たる感染源は罹病樹から流れ出す菌泥で、風雨により飛散して葉や新梢に感染し、周囲の樹、園地へ拡大する。

5 防除対策

本病の防除対策は、予防(予防的薬剤散布)と感染の早期発見等、感染拡大防止対策(発症部の早期除去)が主体となる。

特に昨年の本病発生園地や周囲に発生園地があった場合等は、冬春期の防除対策を徹底する。

- (1) 剪定後、銅水和剤を定期的に散布する。
- (2) 2月上旬からは場の巡回頻度を高め、樹液の漏出等(写真1)の病徴の早期発見に努める。また、発生が疑われる場合は、速やかに関係機関へ連絡し、対応を協議する。



写真1 枝からの褐色の樹液の流出痕(中国系2倍体品種)

- (3) 器具や人への病原菌の付着による伝染を防ぐため、園地内の衛生管理を徹底する。
 - ① 器具の使いまわし等を行わない。ハサミやノコギリ等の器具は、次亜塩素酸ナトリウム水溶液(ハイター等)で消毒して使用する。
 - ② 園地に入出入りする際は手を70%アルコールで消毒し、靴底の泥を落とし、消毒する。
 - ③ 収穫かごやキャリーに植物残渣を混入させない。
 - ④ 園地から立ち去る前に、すべての服、帽子、靴についての植物残渣は除く。
 - ⑤ 発生園で作業した場合は、そのままの服装で他の園へは行かない。